

2019
Summer
Vol.02

TOKYO MOVING
ROUND

秋葉原・御徒町

つながると、
自分が広がる



東京の、
ちょっとだけ
未来の景色。

ここでは、いろいろな街と街、いろいろな人と人が、
山手線という、フシギな輪っかにつながっている。
違うもの同士が、つながりながら、ひろがっている。

そこから生まれてくるものは、
思いもよらない発見、出会い、楽しさ、優しさ…。
心が動き動かされる、新鮮な日々。

そこに生きるみんなで、
東京を世界でいちばんの感動に満ちた
ワンダープレイスにしていけたらいいなと思う。

具体的に何が生まれるかは、きっと本当にいろいろ、
そしてまだ、本当に未知数だらけ。

でもそれが、これからいろいろな人たちと
いっしょにつくっていく、
開かれた山手線の可能性だと思う。

TOKYO MOVING
GROUND



東京感動線

Little Japan



1・2・3) 2019年5月31日「Global Community Cafe」のオープニングイベントが開催。地元の外国人や地域住民、日本人ボランティアなど大勢が集まり賑わいをみせた。簡単な自己紹介から始まり、テーブルを同じくした者どうしが談笑。外国語が苦手でもスタッフがサポートしてくれるので、言葉の壁を心配する必要はない

世界と東京が 東京と地方が つながり 円滑なコミュニティが生まれる

4) Little Japanでのイベント「蔵前ローカルラウンジ」の参加者、上田寛さん。東京と出身地である石川県を行き来し、地元を盛り上げる活動を行っているという。5) 第7回「蔵前ローカルラウンジ」の様子。今回は秋田県羽後町を取り上げた



地域と世界が交わる ユニークなゲストハウス

近年、訪日外国人観光客の増加にともない、日本各地でゲストハウスが続々と登場している。ゲストハウスというと、単なる簡易宿泊所をイメージする方が多いかもしれないが、注目すべきはそれぞれの施設がじつに个性的である点だ。2017年5月にオープンした「Little Japan」はそのひとつ。

JR浅草橋駅から徒歩6分、多種多様なカルチャーが混在した秋葉原・御徒町エリアの散策に最適な場所に位置し、さまざまな人で日々賑わいをみせている。

コンセプトは「地域と世界をつなぐ」と「COME AS A GUEST, GO AS A FRIEND」(帰るときは友達で)の2つ。その言葉を体現するかのようには、建物内では外国人や日本人のゲスト、地元住民たちが、時間と空間を共有する独特の環境をつくりあげている。

2019年5月からは1階のカフェ&バーに「Global Community Cafe」がスタート。台東区在住の外国人と日本人のコミュニケーション促進を目的とした取り組みで、毎週金・日曜日の15時〜17時まで、台東区の人なら誰もが無料で参加できるサービスタ。外国語が苦手でも、子どもでも、あ

らゆる人が歓迎され、飲み物やお菓子も無料で用意されている。

その背景にあるのは、日本に住む外国人が年々増え続けている現状。移住した外国人が日本人コミュニティに溶け込むのはなかなか難しく、小さなトラブルを生むことも少なくないのではないかと問題意識が、かねてからあった。ゆえに新しい地域の住民と、もともと住んでいる住民がつながれる場をつくらうと、台東区とNPO法人芸術家の村との協働事業として始めることになったのだ。

またカフェ&バーはスペース貸しが行われており、日本の地域の魅力を発信するイベントや、英語でコメディのパフォーマンスをするオープンマイクイベントなど、多彩なイベントが開催されている。日中の「気まぐれキッチン」も大人気だ。これはメニューのみならずキッチン担当までもが日替わりのランチで、地元のお母さんが腕を振るう和食やジビエ料理など、バラエティに富んだメニューが提供されている。

バー営業では酒蔵のある地域へも興味を抱いてもらおうと、47都道府県の日本酒が2時間2000円で飲み放題というお得なプランも実施。まさに「Little Japan」は、東京、地方、世界へ開かれた入り口と呼べるだろう。



1・2) ゲストハウス Little Japan の1階にあるカフェ&バーでは、宿泊者ではない日本人に加え、日常的に外国人が利用している。スタッフは語学が堪能で、英語以外の複数の言語が飛び交っている



3) 各部屋にはすべて木製2段ベッドを設置。各ベッドには貴重品ボックスと小さな机、読書灯がついている。写真は2段ベッドが1台設置されているツイン。4) ドミトリーは女性専用と男女混合がある。5) 宿泊者専用の量のラウンジ。無料で利用できる冷蔵庫、ケトル、電子レンジも設置



フロア案内

- 4F | 4人部屋×2、ツイン、シャワールーム、トイレ
- 3F | 女性専用6人ドミトリー、ツイン、6人部屋、トイレ
- 2F | 男女混合10人ドミトリー、ラウンジ、トイレ
- 1F | Cafe&BAR、オフィススペース、トイレ

DATA

Little Japan
 住所：東京都台東区浅草橋3-10-8
 Tel：03-5825-4076
 チェックイン：15:00～23:00
 チェックアウト：8:00～10:00
 ベッド数：34
 宿泊料金：ツイン5,600円/泊/部屋（一人2,800円/泊）～、4人部屋 9,800円/泊/部屋（一人2,450円/泊）～、6人部屋 1,4700円/泊/部屋（一人2,450円/泊）～、女性専用6人ドミトリー 2,660円/泊～、男女混合10人ドミトリー 2,450円/泊～
 www.littlejapan.jp

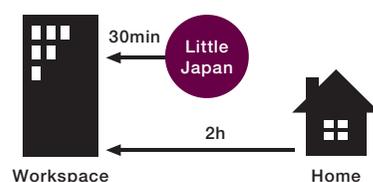
通う仕事の都合などがあるならば、第2の家として東京のホステルを利用するのもおすすめ。場所を特定せずに仕事ができるフリーランス業なら、その日の気分やスケジュールに合わせて各地のホステルに宿泊し、旅するようなライフスタイルが実現できる。

地方への移住はハードルが高く、決断に踏み切れない場合もあるはず。しかしホステルパスをもてば、東京での仕事を変え、ことなく地方に住める。田舎と都心を楽しむ2拠点生活をサポートしてくれるのだ。HostelLifeは、働き方や暮らし方の多様化がより一層進むであろう少し先の未来にマッチした、画期的なサービスといえる。



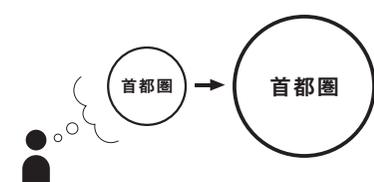
2拠点ライフの提案
 ゲストハウスの新しい価値

2拠点ライフスタイルが
 時間とコストを減らし



出社は職場から近いホステルに宿泊すれば、通勤時間が短縮される。週末またはリモートワーク日は自然豊かな地域の自宅で過ごせる

職場に通える、
 「首都圏」を広げる



HostelLife利用で「都内にある職場に毎日通うための首都圏」という概念が広がり、住むエリアの選択肢が増え、暮らしがより充実

ゲストハウスを利用した
 2拠点生活のススメ

ゲストハウス「Little Japan」を運営するのは、柚木理雄さんが代表を務める株式会社 Little Japan。2018年11月には、月額定額制のホステルパスをもつことで、全国のホステルが泊まり放題になる「Hostel Life」を、会社の事業として開始した。価格は月額1・5万円と、非常にリーズナブル。登録ホステルの数は、ゲストハウス Little Japanを含み北海道から離島まで現在13施設で、今後は海外も含めたさまざまなホステルで展開される予定だという。

Hostel Lifeによって目指すのは、東京の通勤圏を広げること。いま多くの人は、職場のある場所を基準に、居住エリアを選んでいくだろう。職住近接で、都心に住み自然が豊かではなかったり、逆に自然豊かな地に住んでいるが、通勤に1時間以上かかるのは、決して珍しい話ではない。

しかし職場の近くにあるホステルに宿泊して、そこから会社に通えば、住まいの選択肢は大幅に増える。サーフィンが好きななら海の近く、緑が好きなら山の近くに家を構え、平日はホステルに泊まればいいのだ。

逆に地方在住で、都内へ頻繁に



(Little Japan代表取締役)

柚木理雄

Profile

株式会社 Little Japan 代表、NPO 法人 芸術家の村理事長、中央大学特任准教授。兵庫県出身。京都大学卒業後、農林水産省に入省。2012 年 NPO 法人 芸術家の村を、2017 年株式会社 Little Japan を設立

つながりが生み出す意識変革が
受容性の高い人と街をつくる

株式会社 Little Japan を設立される前、NPO 法人 芸術家の村を立ち上げられたそうですね。

ええ、2012 年 12 月ですね。きっかけは東日本大震災でした。当時、私は農林水産省に勤務をしていたのですが、現場の方々の大変さなどを感じることもあり、自分も直接的な担い手の一人として関わっていきたくて考えたんです。芸術家の村での主な活動は空き家の活用。私自身、将来的に両親の実家を空き家として引き継ぐ可能

「さまざまな切り口のアプローチで 多様な文化を受け入れる場をつくる」

性が高く、加えて各地にある空き家が廃墟化している現状を、社会問題として取り上げていきたいという背景がありました。

2017 年 1 月末に農林水産省を退職し、株式会社 Little Japan を設立。国の組織にいても正直自分の代わりはいるでしょうし、まだ数の少ないプレイヤーとして、より本格的に取り組んでいこうと決意したんです。

根本的な部分を辿ると、私は小学校 1 年生から 3 年生までブラジ

ルで過ごしているんですね。帰国して思ったのは、日本の教育に対する違和感でした。同じ価値観を広げたいが、同調圧力というかもろろいい面もあります。しかし私には非常に疑問で、それが大

学時代にバックパッカーをしたり、フランスへの留学に結びつくのですが、あるとき、日本が嫌だから海外に逃げていたんだなと気付くんです。日本の嫌いなところを自分の手でよくしていこうと思い、農林水産省へ入省しました。

国の組織にいるからこそ、実現できたこともあるのでは？

国で決める範囲はとも多い気がしたんですが、補助金を出して施策に誘導するよりも、各々が自由で活動するほうがもっと豊かな日本になるのではないかと。自治体や企業、住民それぞれが暮らしたい街をつくり、その集合体が日本という国になっていくほうが、もっと柔軟じゃないかと。均一化された日本ではなくて、ですね。全員が同じルールの中で生活す

るよりも「自分はこんな街に住みたい」という視点で住む街を選べるようになってほしい。私はその中のひとつとなる場づくりをしていこうと考えたんです。

株式会社 Little Japan の概要 についてお聞かせください。

「地域の資源を活かした事業をつくる」をミッションとし、「活力があり、多様な側面をもった地域が集まる日本」をビジョンとして掲げています。ゲストハウス Little Japan のコンセプトを「地域と世界をつなぐ」にしたのは、ここが海外からのゲストにとつて日本への入り口になると考えたから。東京のみならず、ゲストハウス周辺の地域、そして日本のいろんな地域の魅力を感じてもらい、互いに交流を深める場所にしたいたい、運営をしています。

私もバックパッカーとして 40 歳以上旅をしましたが、ゲストハウスの一番の魅力は人とのつながりだと感じているんです。観光地も行くけれど、強く印象に残っているのは、現地の方とのコミュニケーション。その国で暮らす方はどんな生活をされているのかに興味があるんです。

一方、空き家対策としてゲストハウスをつくる動きも起きていますが、経営が順調でなければ、空き家に戻ってしまう懸念があります。

す。そんなゲストハウスの活用方法が、2 拠点居住になるのではないかと考えました。それが「Hostel Life」にも結びついていて、私がかねてより提起している空き家問題解決の手段にも最適なのではないかと。さらに利用者は田舎と東京の暮らしを楽しむ、新しいライフスタイルとしてより幸福な生活を送ることができそうです。この全く異なる 2 つの観点から、Hostel Life は生まれました。

また事務局メンバーでもある「ゲストハウスサミット」では、全国からゲストハウスのオーナーが集結し、それぞれの取り組みの共有、オーナー同士の連携、ゲストハウスの未来について話し合うといった活動を行っています。

ゲストハウス Little Japan が 地域と世界をつなぐ場として発展し、Hostel Life の利用が当たり前 となった未来を、どのようにイメージされていますか？

ゲストハウスはすごくいい環境が生み出されているんです。外国人ゲスト、地元の方、ホステルパス利用者、カフェ&バーのお客さま、いろんな方が集まり、ミックスされている。この状態が続いたらうれしいですね。つながりが創出されることで、互いに多様性を許容し合い、より多様な文化を受け入れられるはずですから。

女性の手しごとで 物語の環を形づくる

女性たちの「Will」を 手しごとの雑貨で応援する

昭和の空気を残す台東区最古のビル。(株) Will Labの代表・小安美和さんは、この春リリースしたECサイト「そらとひと」のショールームをこのビルの一室に構えた。インドの職人が刺繍を施したストール、ミャンマーの女性が編んだタティングレースのアクセサリーなど、東南アジア諸国や日本の女性起業家たちによる手しごとの雑貨がこの部屋に馴染んでいる。東南アジア諸国に生きる女性たちの現状を初めて目の当たりにしたのは、2000年代前半のこと。「ミャンマーもラオスもカンボジアもいまよりずっと貧しくて、多くの人が貨幣経済から取り残されていた。とくに女性の貧困や雇用の問題は深刻でしたね。その様子を見て、寄付ではなく、サステナブルに経済をまわすビジネス

をした、と痛感したんです」その想いは、すぐにカタチにはならなかった。帰国後は企業で11年間必死に働き、執行役員に名を連ねるまでに。2016年、置き去りにしてきた思いに改めて向き合つて退職し、2年かけて東南アジア諸国をまわった。「驚いたことに、そこはもう途上国」ではありませんでした。女性起業家たちが誕生して、自ら課題を解決しようという動きが起きている。そんな彼女たちの活動を日本に伝えたい、と思ったことがすべての始まりです」

立ち上げました。日本人女性の方が「Musu」に縛られてWillの見えていない人が多い。その意味では日本こそ、途上国「かもしれない」法人設立に先駆けて、東南アジアの女性起業家たちが手がける雑貨を紹介するギャラリーも開いた。「気に入って買ってもらえれば、現地の女性たちの応援になるから、もちろんうれしい。でも同時に、彼女たちのWillを日本の女性たちに見てほしい、そして一歩踏み出すきっかけにしてほしい、という想いも強くありましたね」

「実は、起業したときからいつか蔵前に移るのが夢で、みんなで「イックラプロジェクト」って呼んでいたんです(笑)。蔵前には、ものづくりとまちづくりが一体化した世界観があります。各地の作り手に会いに行つて、その思いを理解しながら作り上げた「そらとひと」は、この街にぴったり」

現地でものづくりに励む職人、その営みを持続可能にする起業家、彼女たちを応援する小安さん。「そらとひと」の雑貨は、いくつもの物語をつなげていく。「空がつながっているように、人と人もつながりたい。そこに生まれる循環の中で、人はエンパワーしあうことができます。美和という私の名前には、「美しい環」という意味があるんですよ、きつと」環状線のようにうずまきながら高みへと向かうその先に、小安さんは誰もが自分自身のWillを叶えられる未来を思い描いている。

アトリエそらとひと

(株) Will Lab (ウィルラボ) 代表

小安美和

Profile

東京外国語大学卒業。日本経済新聞、海外生活を経て、2005年、(株)リクルート入社。(株)リクルートホールディングスにて「子育てしながら働きやすい世の中を共に創る iction!」プロジェクト推進事務局長などを経て退社。2017年、(株) Will Lab 設立



カンボジアで作られた「SALASU」のサコッシュ。作業に携わった全員の名前のスタンプから、ものづくりへの強い思いが伝わる

DATA

そらとひと

住所：東京都台東区蔵前4-30-7 タイガービル27号
info@soratohito.jp (来訪者は要予約)
http://soratohito.jp/

「見る」の向こう側にある本質との邂逅



仏教と美術と現代をつなぐ
瞑想ギャラリー

白い玉砂利を踏みしめて進んだ先に広がる真っ白な空間。外界と遮断されたその空間で、作品と一対一で向き合う。いつしか自身自身を見つめている時間の中で、見えているようで見えていなかったもの、見えるのに見えていなかったものが見えてくる。

浄土宗伝授山長應院の境内にあるギャラリー「空蓮房」は、当代23世住職の谷口昌良さんが2006（平成18）年に開設。写真が趣味だった先々代の影響で、子どもの頃から写真を撮っていたという谷口さんは20代の頃、ニューヨークの美術大学で写真を学んだ。

「写真と仏教が私にとっての原風景です。大学で学ぶかたわら、僧として活動する中で、写真表現の背景にある思想について問答するようになりました。空蓮房はもともと、その問答をする場所として開きました」

名前に冠した「空」は、般若心経で「色即是空 空即是色」（物質には実体がない、実体はないけれども存在する）と説く境地に由来する。「空」は、写真表現、仏教のいずれにおいても重要なキーワードだという。

「サンテグジュペリの『星の王

子さま』に、心で見なくちゃ、ものごとはよく見えないってことさ。かんじんなことは、目に見えないんだよ」という言葉があります。まさにその通りで、空蓮房で作品と対峙していると、目には見えない本質が見えてくるんです」

来廊を望む声に応え、年2〜3回の企画展を開催するギャラリーとなつてからも、入廊は一人ずつの完全予約制としている理由もそこにある。

「拝観後に声をかけると、皆さん言葉がどんどんあふれてくる。感想はもちろんですが、自分のことや悩みなども話してくれます。本質が見えると、自分のことも見えるようになる。その想いを誰かに聞いてもらうことで心が安らくなるんですね。情報過多で本当のことが見えづらくなっているいまの世の中で、本当のことを目にして、そうして誰かの温かみに触れることで、デジタルの世界では満たされない想いを感じていただいているということなのだと思います」

谷口さんは「お寺は心の相談室」だと言う。心を清める場所であり、リセットする場所でもある。そして、いままで知らなかった視点から世界を見ることで、新たな光を与えてくれる。空蓮房は、その最たる存在といえるだろう。

長應院 空蓮房

DATA

空蓮房

住所：東京都台東区蔵前4-17-14
kurenboh@nifty.com
開廊時間：展覧会会期中の水～金10:00～16:00
（最終入廊15:00、1回1時間の完全予約制、
法務の都合で予約日時に制限がある場合あり）
開廊日：展覧会会期中のみ開廊
https://kurenboh.com

アーティスト集団「81 BASTA RDS」がデザイン。俵屋宗達筆の風神雷神図をモチーフに、神々の世界をシンプルに表現。下写真の部屋と共通するモチーフを描くことで、2部屋が呼応



客室は「体感できるアート」の見本帳。キュレーター佐藤拓と「51.3 G-WAVE」がコラボした客室は、海外で解釈された「禅」の世界を作為的に割り出している



アートに包まれて過ごす。価値を広める仕組み

BnA STUDIO Akihabara

新しいアートの体験が人とのつながりを生む

「ホテルというかたちを取ったのは、アートを存分に味わう体験をしてほしいから。ギャラリィで作品に對峙する時間は、5分もないでしょ。でもホテルなら観客はアートの中に長時間滞在できる。アーティストにとっては自分の世界観に誰かを留める装置として、宿泊客にとってはひと晩かけてアートに包まれる貴重な体験ができる場として、相互に魅力的なんです」
そう語るのは、「BnA STUDIO Akihabara」を企画・運営する田澤悠さん。現在、欧米からの感度の高い富裕層の間で話題のここは、

宿泊費の一部をアーティストに還元しているという。宿泊客が作品を提供したアーティストの支援者となり、新たなオーダーのきっかけになることも多いとか。
「僕たちのプロジェクトは、コミュニティを通して、つながりが鍵。たとえば参加アーティストは僕らが直接探すのではなく、東京を拠点とするアートディレクターのコミュニティにアクセスして選り抜きのメンバーを集めてもらいました。」

部屋が稼働すれば、次はアーティストと宿泊客との新たなコミュニティが築かれる。それぞれのコミュニティ同士が交錯して、新たな展開を生み出しています。

DATA
BnA STUDIO Akihabara
住所：東京都千代田区外神田6-3-3
Tel：03-5846-8876
チェックイン：15:00
チェックアウト：10:00
部屋数：5
料金：2万5000円～5万円（1部屋1泊）
www.bna-akihabara.com



上写真の部屋が神の世界を描いたのに対し、こちらは俗界。すべての生物がもつ「生」の姿を描く。どの客室も決められた図面はなく、作品性を優先して空間を決定するアプローチ

フクモリ マーチエキュート 神田万世橋店

ランチの一番人気は、山形牛のハンバーグ定食。サラダで使用する、青々とした野菜は山形の契約農家「IRO DORI ファーム」などから仕入れる（山形牛ハンバーグ定食 1300円）

山形県の食・文化を運び 東京と、そして地元とを結ぶ。



上) オール山形食材で彩られたひと皿。庄内麩のチップスや六田焼麩の唐揚げ、だだちゃ豆のケーキサレ、たまごの燻製など、これだけで山形の郷土料理を堪能できる。(山形名産フクモリ合わせ 1500円) 右) 東北名産の菜花の一種「キラリボシ」を中心に旬の青菜を使った3種のおひたし。シャキッとした歯触りであっさりいただける。山形名産フクモリ合わせとともに、アルコールとの相性もよい(おひたしフクモリ合わせ 800円)



上) 店内入り口に広がるショップ「タナフクモリ」。山形を中心とした東北と東東京で活躍するクリエイターのプロダクトや、フクモリで使用される食材が並ぶ。下) 看板商品のつや姫(井上農場)は、フクモリでも提供されている



店舗は、明治45年の創業の万世橋駅舎をリノベーションしたマーチエキュート神田万世橋内。アーチを描いた天井や打ち放しコンクリート、壁の赤レンガが駅舎の在りし日を思わせる

人と人の交錯から広がる進化するカフェ「フクモリ」
かつて中央線の神田と御茶ノ水の間に存在した「万世橋駅」。神田川にかかるレンガ造りの遺構をJR東日本が改築したのが2013年。現在は「マーチエキュート神田万世橋」として個性豊かな店舗が軒を連ねる。その中でひと際目を引くのが「フクモリ」だ。シンプルながらゴに惹かれて店の扉を開くと、品のよいプロダクトがあふれ、その奥には神田川を見渡せるカフェスペースが広がる。「マーチエキュートのコンセプトに、馬喰町に開いた1店舗目のフクモリとの共通点を感じました。大正期の駅舎を改築し、神田須田町という歴史ある地域の方々と新しい街づくりを行う。古きを生かす新しい価値を創造することに、

心地よさを覚えました」とフクモリを運営する小松裕行さんは話そう。そもそもフクモリは、クリエイティブディレクターとして活躍する小松さんのネットワークからはじまった。「メニューの食材は、山形産がメイン。仕事でご縁があった山形の旅館に掛け合い、仕入れからメニュー開発まで行いました。山海の幸が集まる山形の滋味をフクモリから発信することで、山形のプレスルームになれれば」と。今後は年々増える海外のゲストにもフクモリの魅力を伝えたいという。「馬喰町フクモリは、地域住民の交流の架け橋になりました。今度は日本と海外のハブとして、この万世橋フクモリが役立てればと。そのためにはフクモリで皆様とごはんを食べながら、この街で愉しく暮らすための作戦会議をする。そんなことができれば。」

DATA

フクモリ マーチエキュート神田万世橋店
住所：東京都千代田区神田須田町1-25-4
Tel：03-6206-8381
営業時間：カフェ / 11:00 ~ 23:00 (L.O.22:00)、
日曜、祝日 ~ 21:00 (L.O.20:00)
雑貨・グロッサリー (タナフクモリ) /
11:00 ~ 20:00 定休日：不定休
<http://fuku-mori.jp/manseibashi>



神田明神



ワインショップ&ダイナー FUJIMARU 浅草橋店

国産・自社醸造ワインだから コミュニケーションを深化させる

神田川を眺めつつ、気軽にワインと食と会話を

「円と縁をかけて農家さんとお客様、私たちによりご縁があるようにという想いを込めています」

『FUJIMARU浅草橋店』の齋藤健一郎店長は自社ワインのエチケットの意匠を指しつつ、続けた。

「産地で味が変わり食との相性も多彩。だからボトルを開けると会話が弾む。そんなワインがつかげる人の輪をつくり続けたくて」

秋葉原の東、小伝馬町にほど近い神田川沿いに『ワインショップ&ダイナーFUJIMARU浅草橋店』はある。大阪でワイン醸造と

ショップ、飲食店を手掛けていた同社が14年に東京進出。自社オリジナルと国内外の美味しいワイン

を直接手に取り、味わってもらうために創った場だ。その後、清澄

白河に醸造所を立ち上げた。

「だからビールのように楽しむ生樽ワインから自然派、クラシック

ワインテージまで約1000種を

揃えました。それに仏、伊、和こ
だわらずワインと合う料理です」
ただ強くこだわることもある。

美味しいワインや食材を誠実につ
くり続けるつくり手を丁寧に紹介
することだ。たとえば写真の3本

山梨のメルロー、山形のマスカッ
トベイリーAとシャルドネは各地
から直接仕入れ、清澄で醸造した。

「いま各地でワイン用のブドウが
育てられて、今後もおもしろ
くなる。微力ながら応援したい」
人と人をワインでつなぐ。ここ

はまた、日本のワインをよりよい
未来へとつなげる場でもあるのだ。



DATA
ワインショップ&ダイナー
FUJIMARU 浅草橋店
住所：東京都中央区東日本橋2-27-19
Sビル2F Tel：03-5829-8190
営業時間：13:00～23:00 (L.O.22:00)
定休日：火・水曜 www.papilles.net

聖俗が出合う場であり続ける

江戸総鎮守の矜持

境内は聖俗の間にある場所
人とともに神社も変わる

徳川家康が戦勝を祈願したこと
から、江戸全体を守護する「江戸
総鎮守」となった神田明神。神社
がもつべき本来の機能を、いまも
もち続けることに留意している。

「神社は古くから大衆が集まる文
化の発展地でしたので、もとより
神社を信仰だけで切り取ることは
できません。民俗学には神聖なも

のと世俗を分ける『聖俗』という
考え方があり、境内はまさに聖と
俗の中間。移りゆく文化を細かく
すくい上げていくことが、神社に
はとて必要です」と語るのは、

観禰宜を務める岸川雅範さん。
毎年、多くの人で賑わう「神田

祭」も時の流れの中で変容してき
た。江戸時代には豪華な山車が巡
行したが、いまでは担ぎ手の威勢
のよい掛け声が下町に響き渡る、
神輿の宮入りがメイン。

「原始的な祭りは、神の力がた
たりに転じないよう願うもの。でも

当時と現代では、当然ながら願
いごとが変わってきています。時代
に合わせて、個人情報漏えいを防ぐ
ために「ITお守り」もつくっ
ています」

そのほかプロセスを境内で開
いたり、地域性もふまえたアニメー
ションとのコラボグッズも販売。
いずれのケースもその時々々の聖俗
の合間であり続けようと、常に顧
みる姿勢が表れているといえる。

「時代の変化を受け入れ、ともに
歩む。変わらぬものを守ろうとす
るばかりでは、世俗と離れてしま
い、伝統を継承しつづけられませ
んから」。



DATA
神田明神
住所：東京都千代田区外神田2-16-2
Tel：03-3254-0753
www.kandamyoujin.or.jp
拝観時間：24時間可能

YLiNUM



自分がいいと思うハンカチを プレゼントしたい、と思っしてほしい

アガタ竹澤ビルの3階に居を構える専門店には、美しく独創的なデザインのハンカチがところ狭しと並ぶ。単純な一枚の布のようでいて、実はそれぞれのハンカチには多くの職人による熟練の技が生きているという。また、安心して使えるよう生地を多くを日本製にこだわり、ガーゼも一度湯通ししてから手触りを調整しているとか。ここYLiNUM（イリナム）のハンカチへの強いこだわりは、どのように生まれたのだろうか？

オーナー・羽澄久子さんは言う。「YLiNUMのハンカチを娘さんに贈った方から、今度は娘さんが親友にプレゼントをするからと新たな注文が入りました。そのときに、

愛用し続けているハンカチの写真を一緒に送ってくれたんです。お手紙も入っていて、変化する布の風合いも楽しんでくれたそうです。そんなハンカチの魅力を大切な人感じてほしいとお客さまが思ってくれたことが、とてもうれしんです。いまでも自分がいいと思っったハンカチをつくり続ける原動力ですね。」

DATA

YLiNUM

住所：東京都千代田区東神田1-2-11
アガタ竹澤ビル305
Tel：03-5829-8568
営業時間：13:00～18:00（不定期営業）
定休日：不定休
（営業時間は同店Instagramを参照）

gallery aM

年に一度、生まれ変わる アートの匣がもつ広がり

1988（昭和63）年に吉祥寺に開設された「ギャラリーaM」を前身とする「gallery aM」は、武蔵野美術大学が運営するノンプロフィットギャラリー。運営委員会が毎年選ぶゲストキュレーターが年間5本の企画展示を行う。「大学が運営しているといっても、アーティストもキュレーターもOB・OGに限定しているわけではありません。学内外の多彩なジャンルのアーティストの作品を見る・見せることが学生の教育、そして日本のアートシーンの活性化につながると考えています」とアシスタントディレクターの神祥子さん。

昨年、プロジェクト開始から30年を迎え、現在の場に開設し



※ a M プロジェクト 2019「東京計画 2019 vol.2 風間サチコ」(企画：藪前知子)

て10年という節目となる今年、通常の企画展示と連動するかたちで、運営委員会が企画に携わる展示1本を行う「aM+」が始動。自由で柔軟なギャラリーとしての在り方に立ち返りつつ、既存の概念にとらわれない視点でアートを発信し、新たな可能性を模索し続ける。

DATA

gallery aM

住所：東京都千代田区東神田1-2-11
アガタ竹澤ビルB1F
Tel：03-5829-9109
開廊時間：11:00～19:00
休廊日：日、月、祝（展覧会会期中のみ開廊）
<http://gallery-alpham.com>

Kiyoyuki Kuwabara Accounting Gallery



大手の会計事務所で公認会計士として働くかわら、趣味の写真学校にも通ったという桑原清幸さんが、独立して開いたのは、会計事務所と画廊を融合した空間だ。「会社を辞めるときも、このビルを借りたときも、まずは驚かれました。『ギャラリーと会計事務所を一緒に?』と（笑）。

会計業務はスペースを取らないので、どうせなら写真家と鑑賞者が交流できる場を併設しようとしたんです。作家が作品について説明することで、作品の価値も上がると思うんです」と桑原さん。運営する「Kiyoyuki Kuwabara Accounting Gallery」では、月ごとの

頻度で写真家の個展を開き、そんな機会を多く設けている。

ギャラリーの設立にあたっては、人との接点の大切さを感じたという。「写真学校でプロの写真家との関係もできましたし、写真集を買いにいった銀座の書店のご主人には設計士を紹介してもらいました。多くの画廊が夕方には閉館するのに対し、ここは遅くまで開けているのも、鑑賞者と作家の密な対話を通じて作品の先にある何かを感じてほしいから」と桑原さん。そんな、人との関係性を大切にしている桑原さんのいる空間では、今日も撮る側と見る側の、深いかかわりが生まれはじめています。

写真作家と鑑賞者が
対話できる場でありたい



アガタ竹澤ビル

ここには複数のギャラリーやハンカチ専門店ほか、ヴィンテージ家具ショップなどが集まる。アートとモノを軸に人が集まる、近隣エリアを象徴するビルといえそうだ

このビルには想いの詰まった小さな世界が集まる
アート、モノ、ヒト。



写真提供:haku / PIXTA(ピクスタ)

1) かつて秋葉原駅のすぐそばにあった神田青果市場。1990年に大田区に移設。
2) 戦後、自然発生的に電気製品を売買する市が立ち「電気街」へ。3) 昨今はオフィスビルが建ち続け人の流れが変わり、電気街・秋葉原は変貌を遂げつつある

新陳代謝を続ける街 「秋葉原」が 辿った変遷

秋葉原の地名は、ある神社に由来するという説が有力だ。火事が多かった昔、この地に火除けの神を祀る秋葉神社（現在は台東区に移設）があり、近辺は原っぱが多かったことから秋葉原と呼ばれるようになったのだとか。

神社といえば人が集まる場所。時を経て戦後、生活の糧を得るために、手持ちの電気製品を売ろうと、元兵隊などの人も集まるように。一方で昔からこの地にあった神田青果市場も、電気街の発展に寄与しているともいわれる。農産物

を売りに来た農家が市場で得た現金収入を家電に換えた。買い手を狙い、さらに売り手が集まる。それらの経緯が後の「秋葉原＝電気街」の素地となったのだろう。

そんな秋葉原は都政の指針もあり、2000年代半ばから、オフィス街へとその姿を変えつつある。2019年9月には高さ約125mのオフィスビル「住友不動産秋葉原ファーストビル」(上右写真)も完成予定。一面的にはとらえきれない、秋葉原の変化を感じられるだろう。

— 山手線エリアの人・食・景色の魅力、発信中 —

山手線各駅の周辺で「東京の、ちょっとだけ未来の景色」を感じさせるスポットや人を、新たな視点で紹介する本プロジェクト。今回フォーカスした、秋葉原・御徒町それぞれの魅力は、小誌ほかウェブサイトでも、動画や掲載しきれなかったスポット情報を加えて発信されている。詳しくは下記URLから確認しよう。

<https://www.jreast.co.jp/tokyomovinground>



左記からも
ウェブサイトへ
アクセスできます

Akihabara
秋葉原

次はあなたの街を
ひも解きます!

Okachimachi
御徒町



1・3)「メタルギャラリー」には作家性の高い作品が並ぶ。デジタル機器を用いることなく、一から手作業で加工するため、大型作品では完成まで1～2年かかるものも。2) 2階フロアには40人の職人が在籍し、顧客のオーダーの一つひとつ丁寧に応える。まさに昔ながらの工房のもの

メタルギャラリー
＜シーフォース株式会社＞

住所：東京都台東区台東4-18-11
tel：03-6821-7776
営業時間：10:00～19:00
定休日：土・日曜、祝日

彫金・鍛金職人の街、御徒町。そのルーツは江戸時代にまで遡る。上野、浅草界隈に神社仏閣が集中していたから、仏具や銀器を手掛ける職人が集まったという説、上野寛永寺の縁日が賑わっていたため、宝飾品を扱う店が自然発生的に増えたという説などいわれはさまざま。おそらくあらゆる要素が相まって、令和の時代に残る宝飾の街がかたちづくられたのだろう。

この街に日本では稀有な、彫金・鍛金作品のみを展示するギャラリーがある。随時並ぶのは、日本を代表する作家数十名の作品。「メタルギャラリー」と名づけられたこのスペースを運営するシーフォース（株）は、1930年創業の金物店を元に、3代目・佐々木一富社長が設立。これだけの作品が揃うのは、先代社長から多くの作家との信頼関係を受け継いでいるゆえ。

約15年前まで、御徒町では1000人ほどの職

人が活躍していたが、その数は急激に減少した。最たる理由は、3Dプリンターが普及し、ジュエリー制作のデジタル化が進んだことだ。同社も積極的にデジタル化を牽引してきたが、その一方で、佐々木社長は職人文化を守り、ものづくりを軸とした街の活性化にも力を入れている。ギャラリーを開設したのも、手しごとの作品を多くの人たちに見てほしいという想いからだ。

1階は彫金・鍛金用工具専門店、2階は貴金属のリフォームなどに応じる工房、3階は先端機器のショールームとして、ものづくり全般を支えるシーフォース。今年11月には、現社屋に隣接して新社屋が完成し、職人の手作業から最新のデジタル技術まで、彫金・鍛金にまつわるすべてが見られるようになる。この総ガラス張りの新社屋が御徒町のランドマークとなり、新たな人の流れが生まれる日は遠くない。

彫金職人の街「御徒町」に「人が集まる場所をつくりたい」

TOKYO MOVING ROUND

あきは
ぼら

秋葉原 AKIHABARA

おかし
まち

御徒町 OKACHIMACHI

TOKYO MOVING
ROUND

東京感動線